



住言名勝圖會



住吉名勝會圖



名所佳境乃世可

多尤る中にも

法海也の記すの

志母らよりゆ記ふら母



ゆきあけのうらみ
きりぎりすのうらみ
住吉のうらみ
ほすもつとて御社

序の巻

のむらさきは夜半の
ゆきあけのうらみ
おののうらみ
せほすもつとて御社

名勝園繪也車馬杖
履法多及此如寸
下几席法あり不縁勝
函遠乃いふや

亭二

之公乃いふや
中塊以或い古今
事蹟は向ふに集り
顔人強中如杖いふ

かゝくはが威を遠く
近濃の墨が妙に
けく寂庵詠吟の
便と云ひむし橋本に

序三

ちのちをえり岸の姫松
りろむにやうな世
とけりしと
志ろあかり

寛政七年上元の

藤波三位寛忠郷

总抄主人書

序の四

凡例

- 此書ハ住吉大小の祭事年中乃行事記悉くを記し之他邦遠境の人に當社祭事の多き神事の美なるを志すべし
- 右祭禮神幸此大成との圖をあつて小なるものも事記し之圖を除く
- 祭禮の圖ハ神殿ノを執行ハモあり之宿院或ハ舞臺等ノを執行ハモあり其祭事ハ其所ノを執行ハモあり其圖ハ其所ノを執行ハモあり
- 年中小祭の行事といふはあつて之を執行ハモあり其圖ハ其所ノを執行ハモあり
- 住吉街道の寺院社頭ハ其所ノを執行ハモあり其圖ハ其所ノを執行ハモあり

乃名所を集一書成故に他の寺社におわすハ圖をか

のこころ其事跡をくわくせぬ

○巻中の繪に現在を画く有過ぎぬ画く有文よりて繪く有古よりて画く有画み寄て画く有抑現在よりたゞ住吉本社の園より御道の敷丁のめき是より過ぎ去り車返りの櫻頭家御安倍野合戦等の園を云文に寄り此菖菖の一休和尚文徳帝住吉行幸のとき詔曰古よりよるゝはほよりりり里に寄り行長居り里の名を此頼まん等の園を云陰よりて画くは俗の所謂繪を云言てさるがき車もおもゝらくあきまゝも眼をく画さなは是より繪の本意を察するの内各紋の菖衣白衣おる人物もよりて紋を画く繪よりて潤色をとりり競馬早乙女の顔なり巻を開く人ばさるる見て用捨きや○住吉社よりある寺社その外村里舊跡一處もさるる此出巻よりこれより次編を俟て合せ見よ

住吉名勝圖會卷之一目錄

神功皇后三韓征伐之圖 御前崎之圖

住吉本社之圖 神宮寺之圖

大海神社之圖 奥天神之圖

住吉街道之圖 今宮札之過之圖

景時詠和歌圖 東之大鳥井之圖

天下茶屋之圖 三文字屋座敷之圖

以上

南郊三十里探勝
愧余癡欲謁歌神
廟徘徊謗賦詩

筱應道



住吉名勝圖會卷之一

日本書記第一曰伊弉諾尊既還乃追悔曰吾前到於不須也
凶目汚穢之處故當滌去吾身之濁穢則往至筑紫日向小戸
掃之檉原而拔除焉遂將盪滌身之所汚乃興言曰上瀨是甚
疾下瀨是太弱便濯中之瀨也因以生神號曰八十狂津日神
次將矯其狂而生神号曰神直日神次太直日神又沉濯於海
底因以生神號曰底津少童命次底筒男命又潛濯於潮中因
以生神號曰中津少童命次中筒男命又浮濯於潮上因以生
神號表津少童命次表筒男命凡有九神矣其底筒男命中筒
男命表筒男命是住吉大神矣



任三河の古神
 奉伊弉諾尊日
 國小戸の橋の境原の
 神号と底海男中男
 表海男と新羅國は
 神功皇后新羅國は
 出遇軍の魁とて
 三韓と手取降朝の
 とも



其海神皇居
 道一海と吾和魂大
 津の津中倉の長峽
 居之とて往來乃
 船と見人とのい
 鎮座の御神と
 神功皇后を
 儀をみり奉り

旧事紀曰其底津少童命 中津少童命 表津少童命 此三神者
阿曇連等齊祠筑紫期香神 底筒男命 中筒男命 表筒男命 此
三神者 津守連等齊祠住吉三所前神

古事紀曰底筒之男命 中筒之男神 上筒之男命 三柱神者 墨
江之三前大神也

同卷曰神功皇后以其御杖衝立新羅國主之門 即以墨江大
神之荒鬼為國守神而祭鎮還渡也

神書鈔云住吉大神其荒鬼在筑紫之小戸和鬼者神功皇后
征三韓之時陰騭玉體而顯坐攝州

風土紀曰所以稱住吉者昔息長足比賣天皇世住吉大神現

出而巡行天下 覓可住國 時到於沼名掠長岡之前 乃謂斯實
可住之國 遂讚稱之云 真住吉國 乃是定神社 今俗略之直稱
須美乃叡

延喜式卷第三曰 凡諸國神社 隨破修理 但攝津國住吉下總
國香取常陸國鹿嶋等神社 正殿廿年一度 改造其料 使用神
稅如無神稅 即充正稅

續日本後記卷第八曰 仁明帝承仁六年八月己巳 攝津國住
吉神祈船船歸着

東鑑云 治承四年八月十六日丙申 自昨日雨降 終日不休 止
為明日合戰 魚為被始行 却祈禱 住吉小太夫 昌長 奉仕 天曹

住吉濱邊

之圖

風雅集 後言

住吉の

浦の

深き

水

は

東進

昔時攝都勝

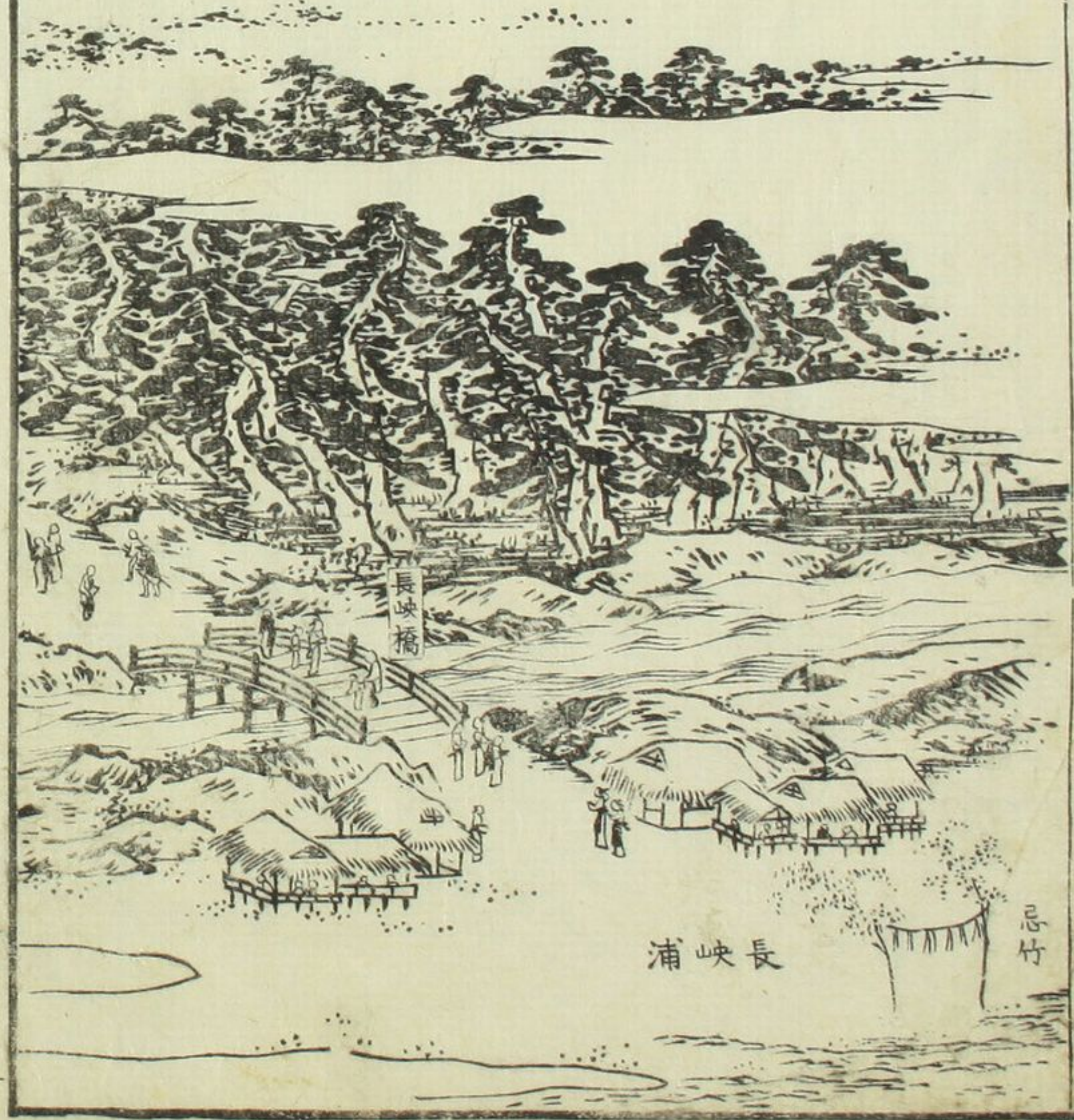
今遊住吉濱

波浸紅日湧

樹接白雲鄰

左臂控南地

前頭際北津



忌竹

浦峽長

一ノ三

漁即沽海賈
行客祭江神
夙抱遠遊志
每羞株守身
何浮滄海上
快活祛胸塵

宗祇

三年

福

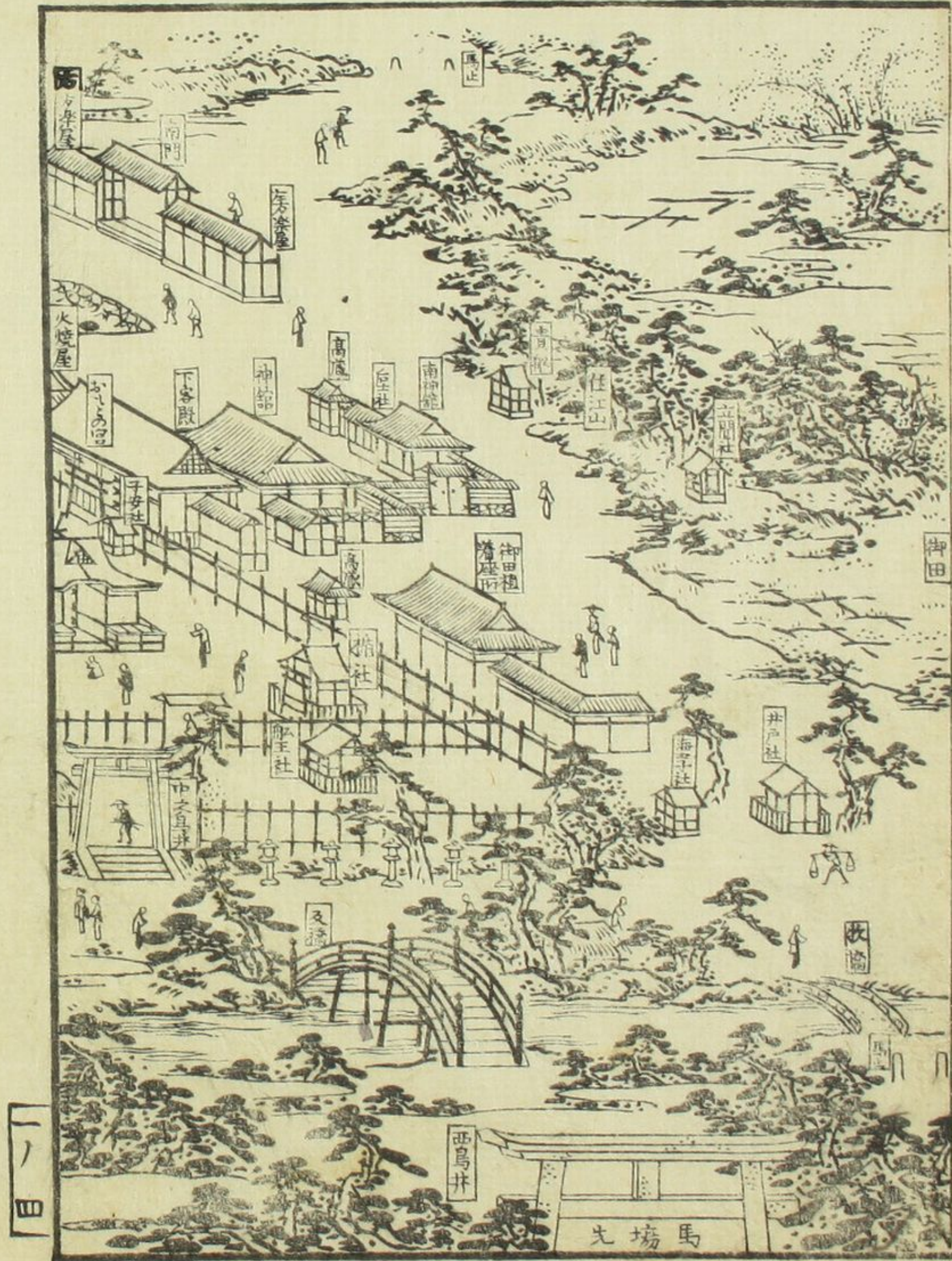
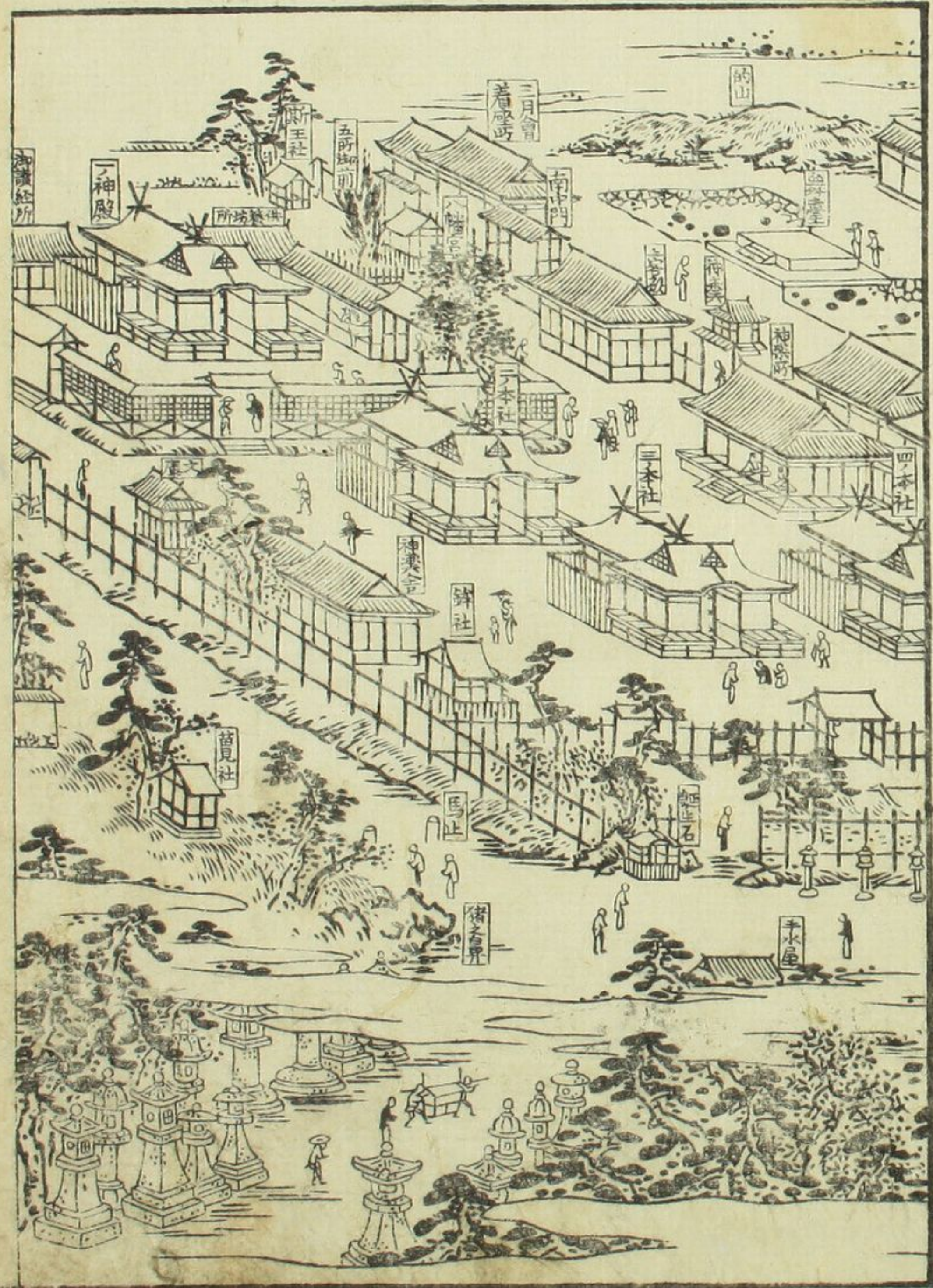
宗祇

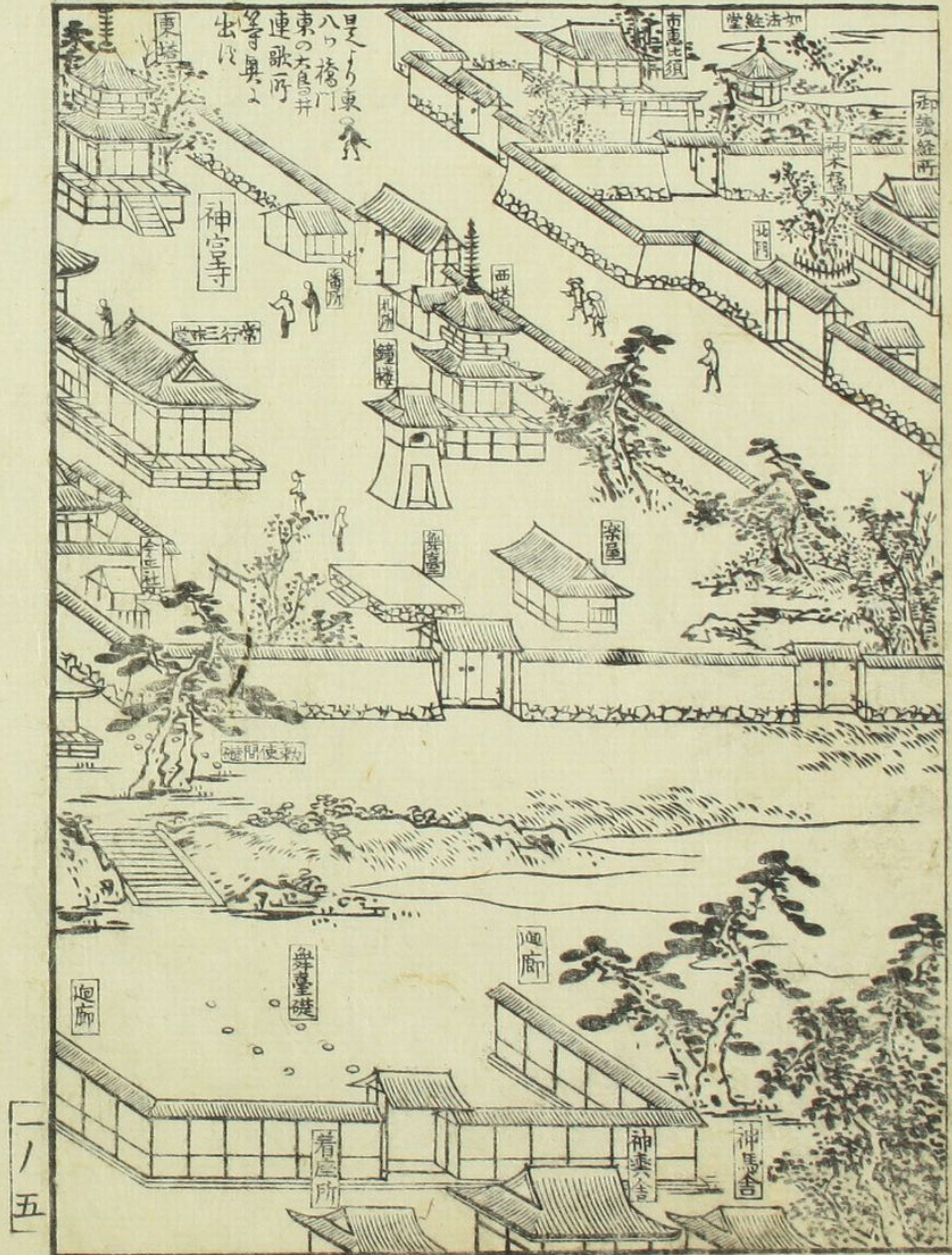
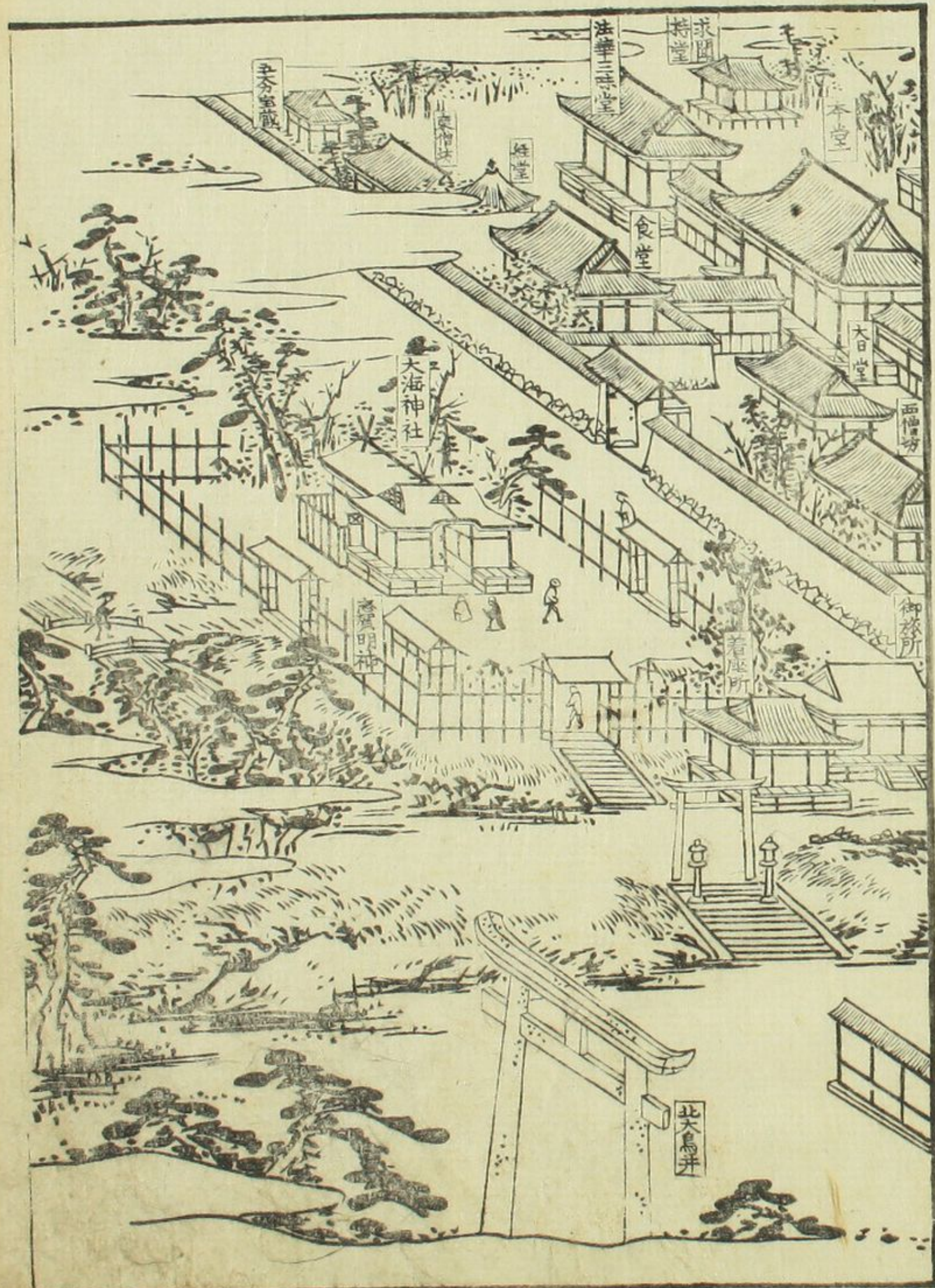
宗祇

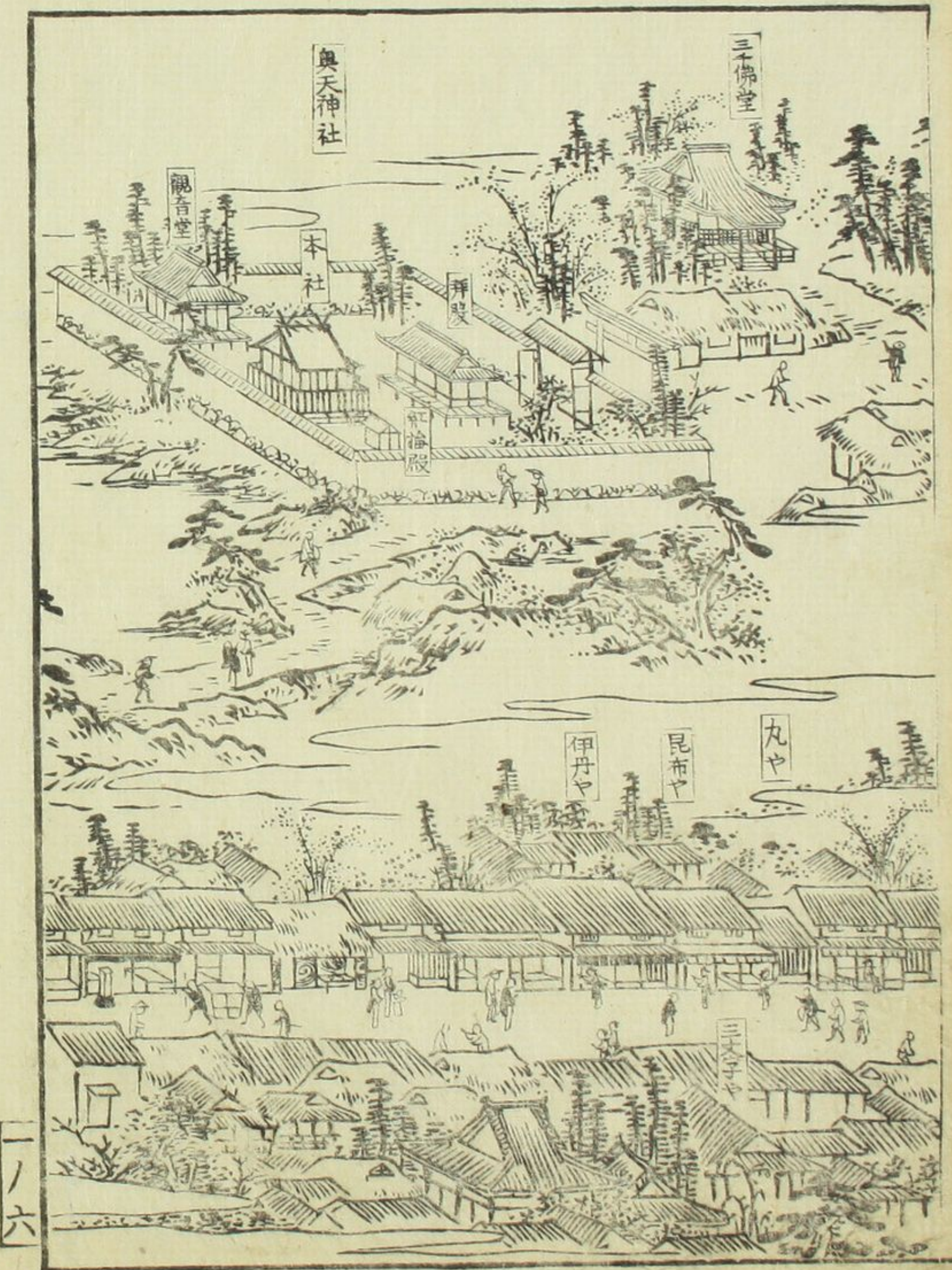
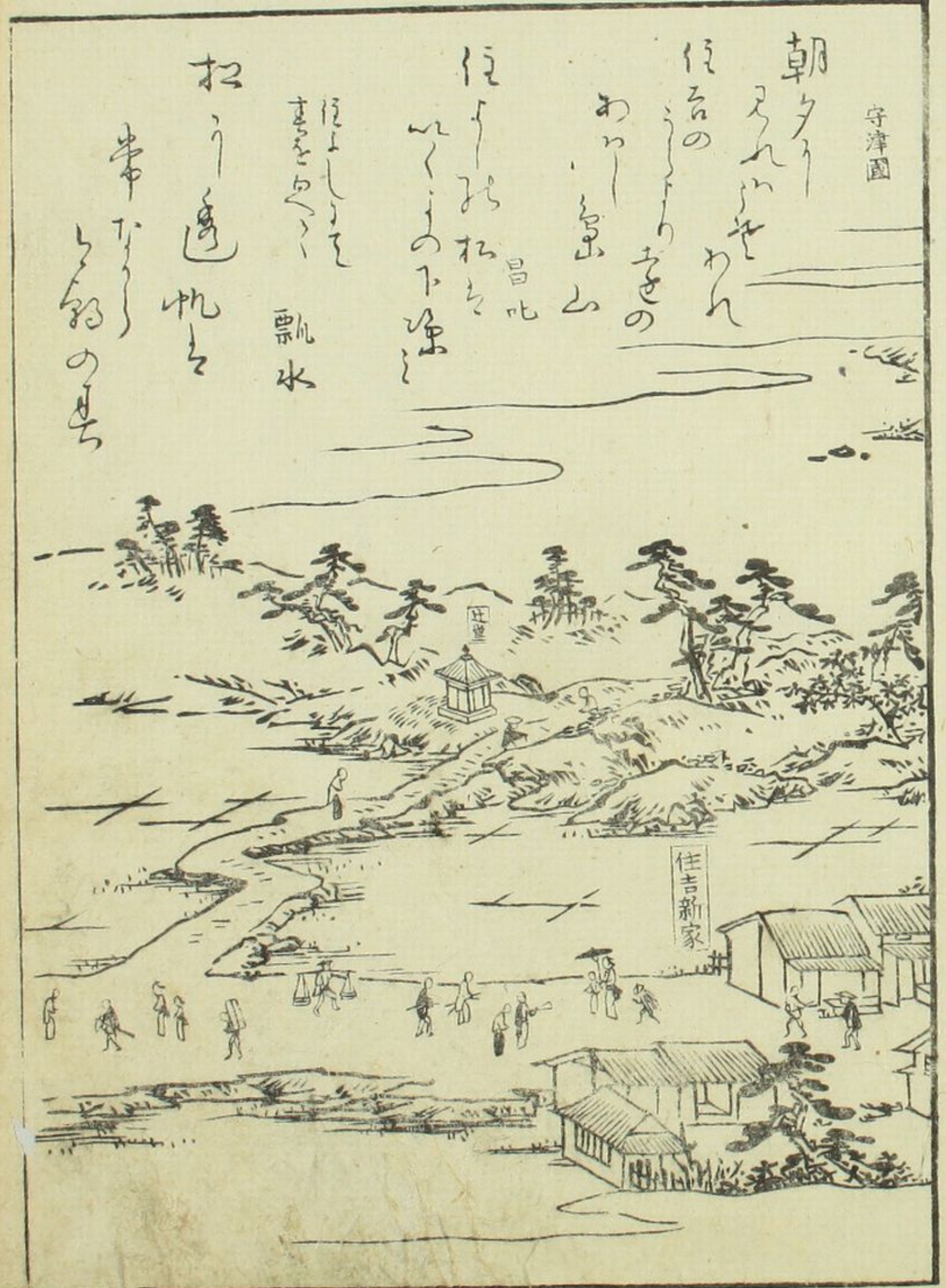


内川

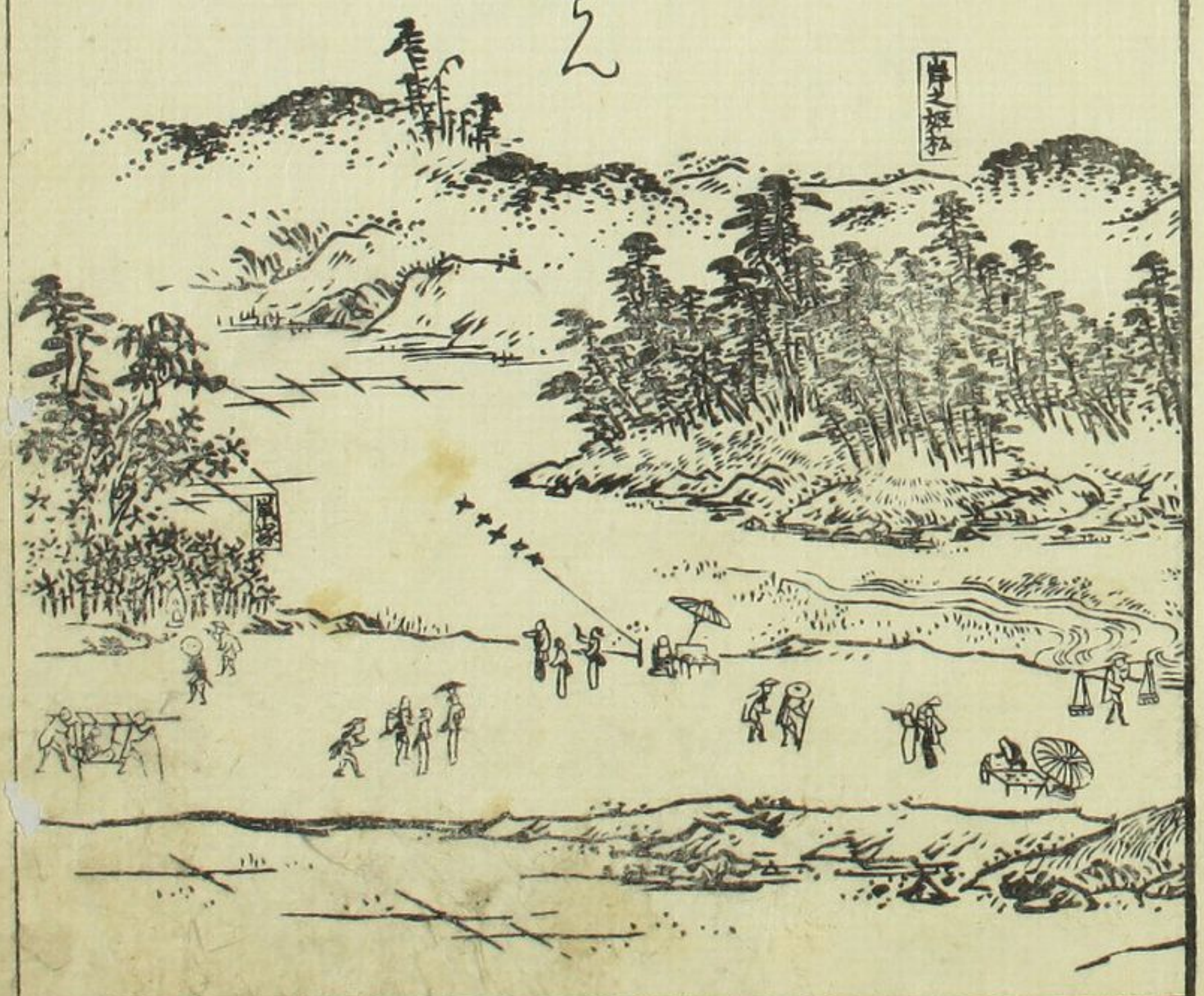
西ノ大鳥井
馬場先筋



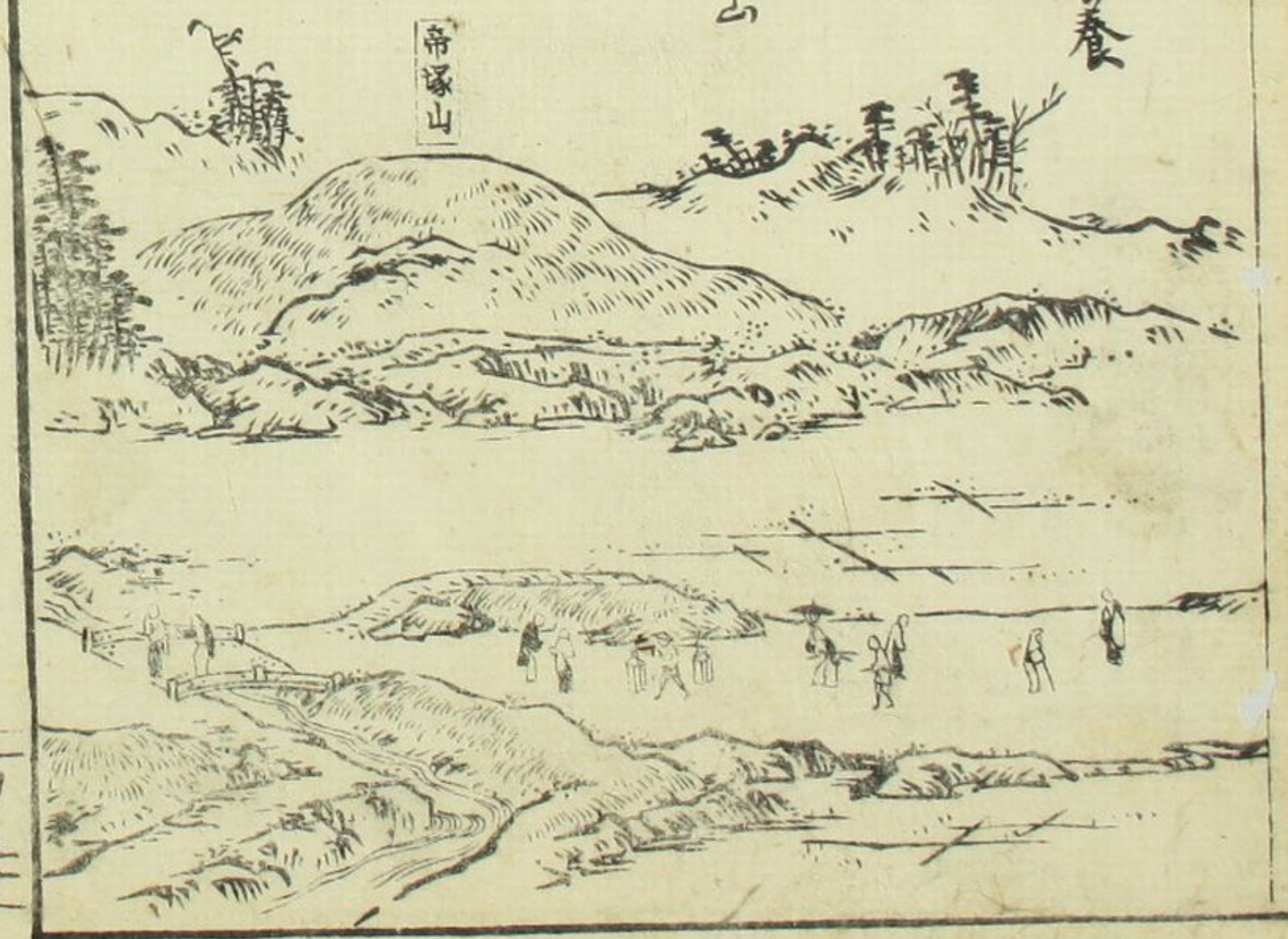




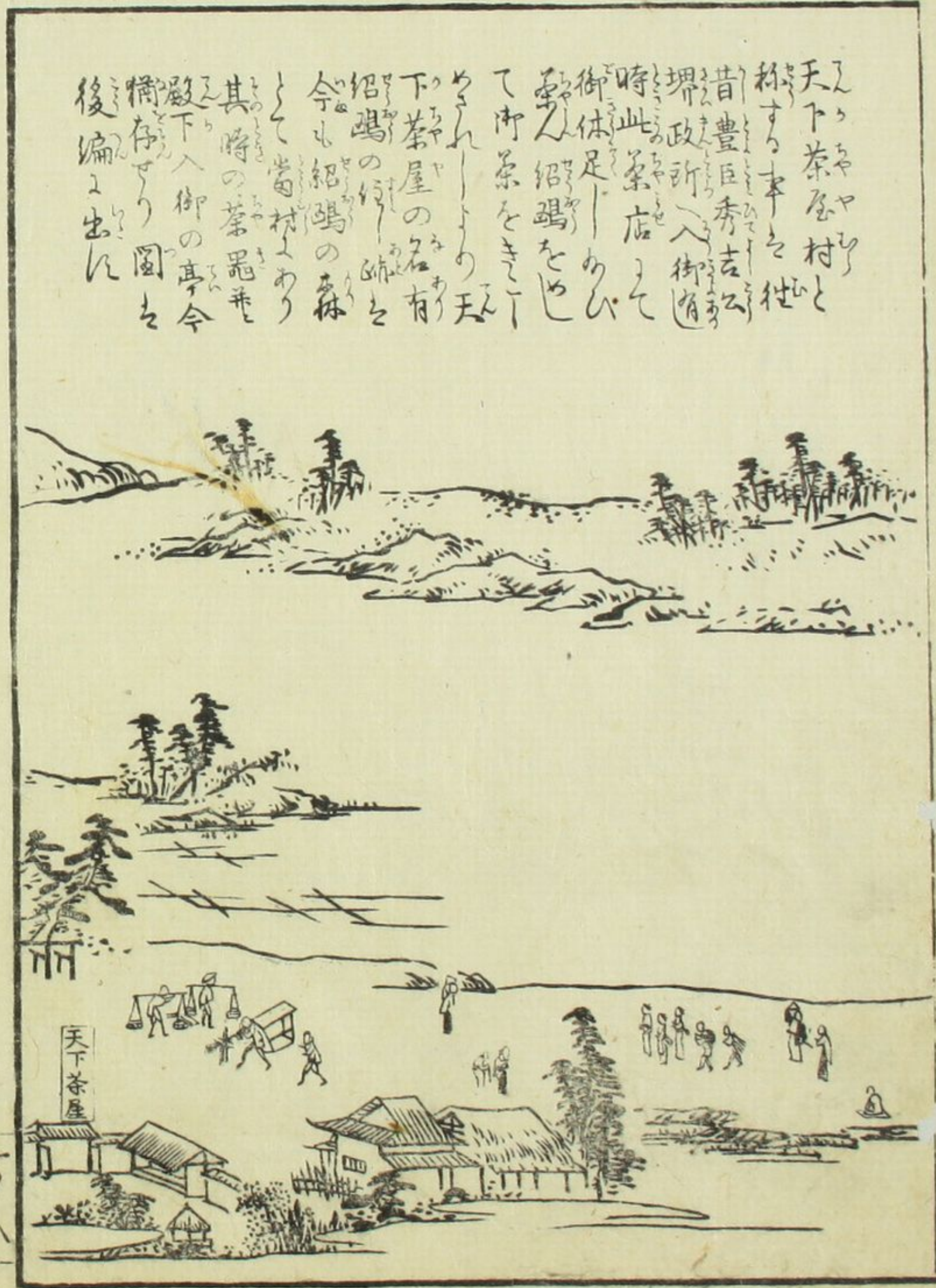
或説云姫松と
 女松をりてと
 小松を姫とい
 と小松なりとい
 といひて
 名をいふ
 何れの女乃姫
 といひて
 のありて見ま
 松のりて早
 意のりて早
 姫のりて早
 姫のりて早



位よりと
 りふり
 りふり
 りふり
 宗養
 海の雲帆
 揺れて
 来山
 雲のり
 見よ半梅の
 の雲



天下茶屋村と
 昔豊巨秀吉公
 堀政所入御道
 時此茶店とて
 御体足しあひ
 勤人紹鷗をよ
 て所茶をき
 下茶屋の名有
 紹鷗の傳はる
 今も紹鷗の森
 として當村あり
 其時の茶器も
 殿下入御の亭今
 猶存あり園を
 後編に出ん



一ノ八

紹鷗の森
 鳥井の額寶鏡
 寺宮乃御宸筆
 御本帝へ天下
 茶屋小兵衛が
 家ニ蔵む

紹鷗の森



子安天神社

子宮

子安名
又モタシ
トモ云

勝向新家



十三夜 芭蕉
 升買ふて分列
 月見哉
 往來の吟
 つる日
 白の梅
 那

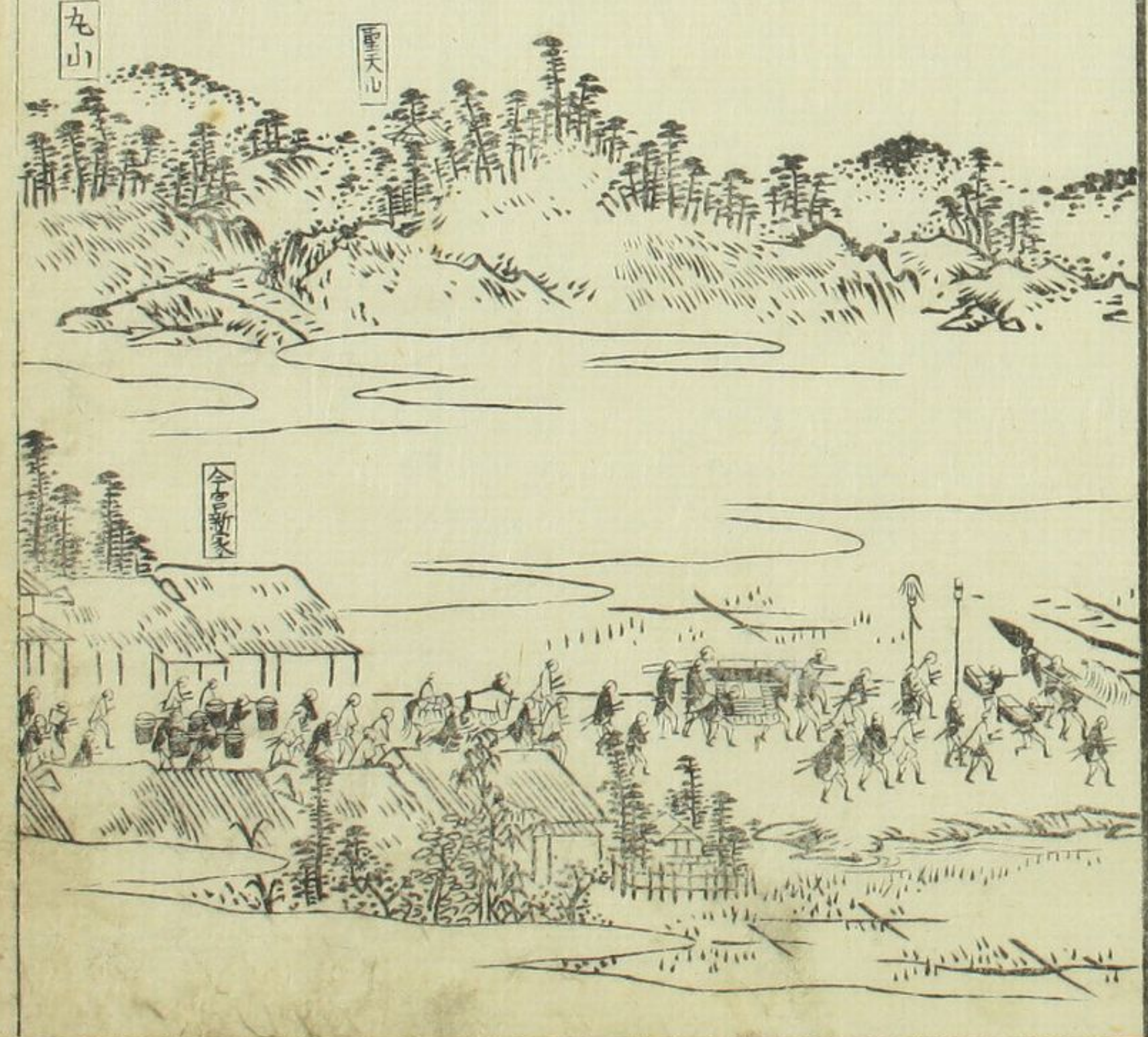
安養寺



詠め入
 日暮
 海つるの景
 貞柳

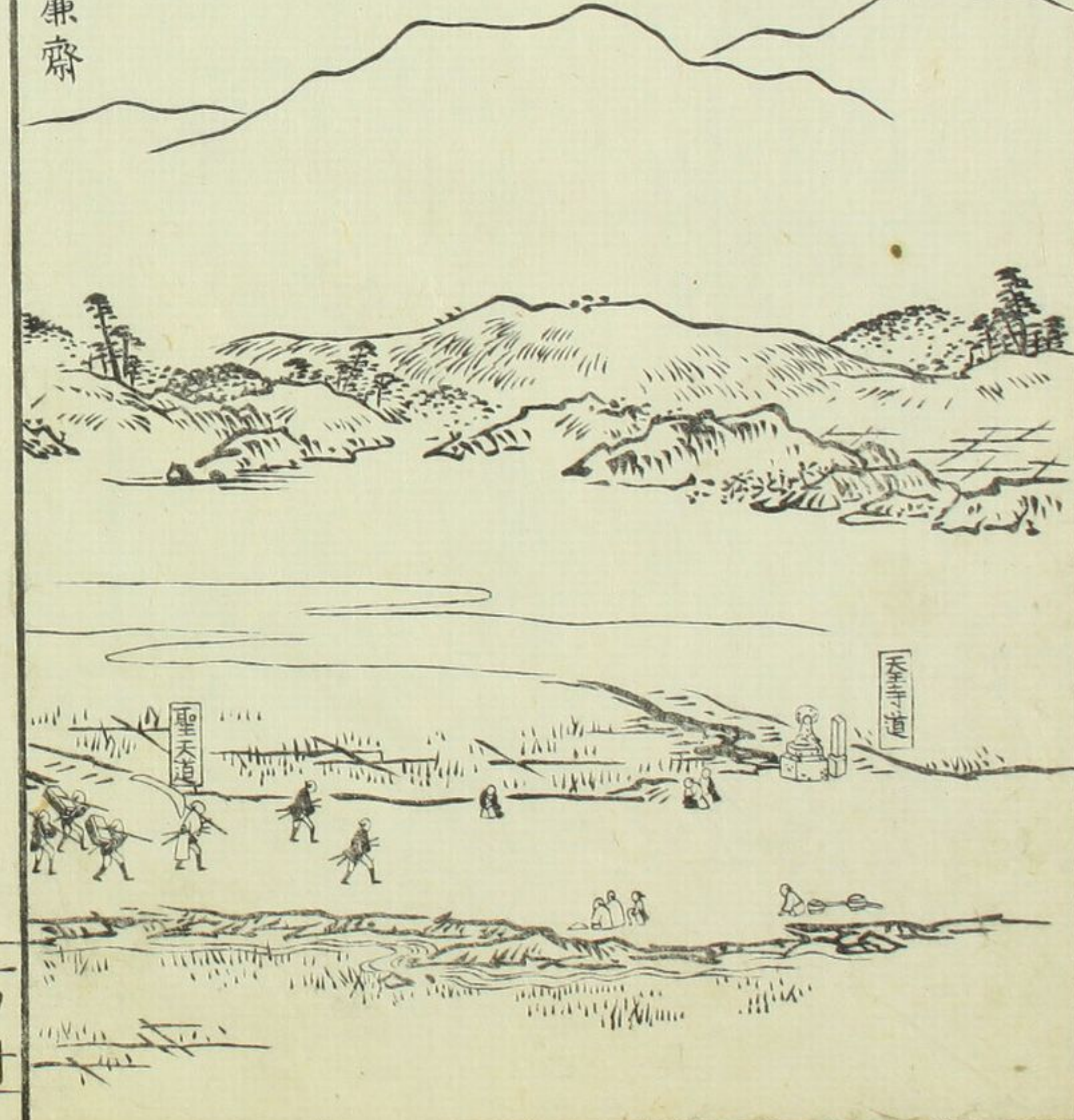
一ノ九

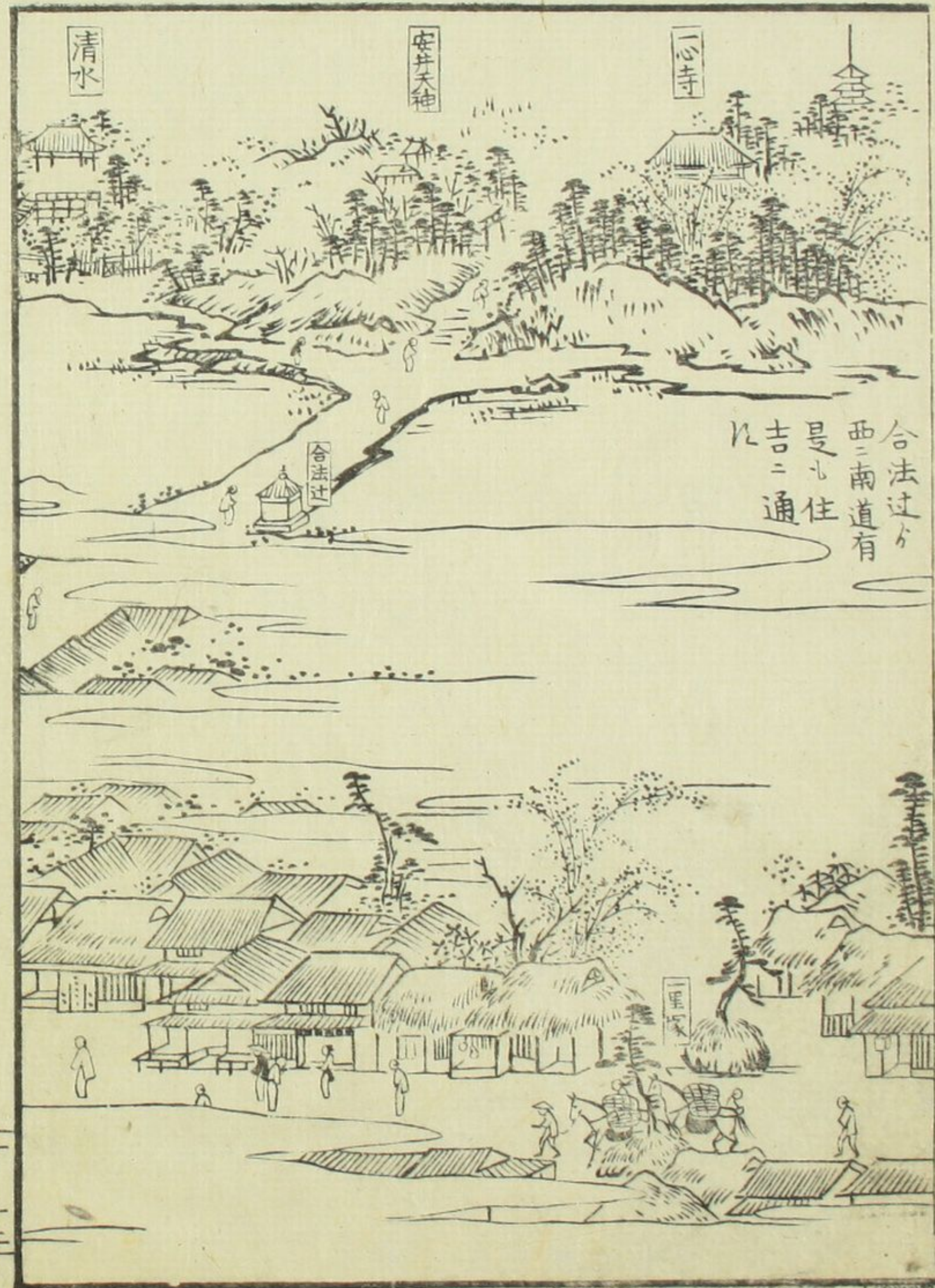
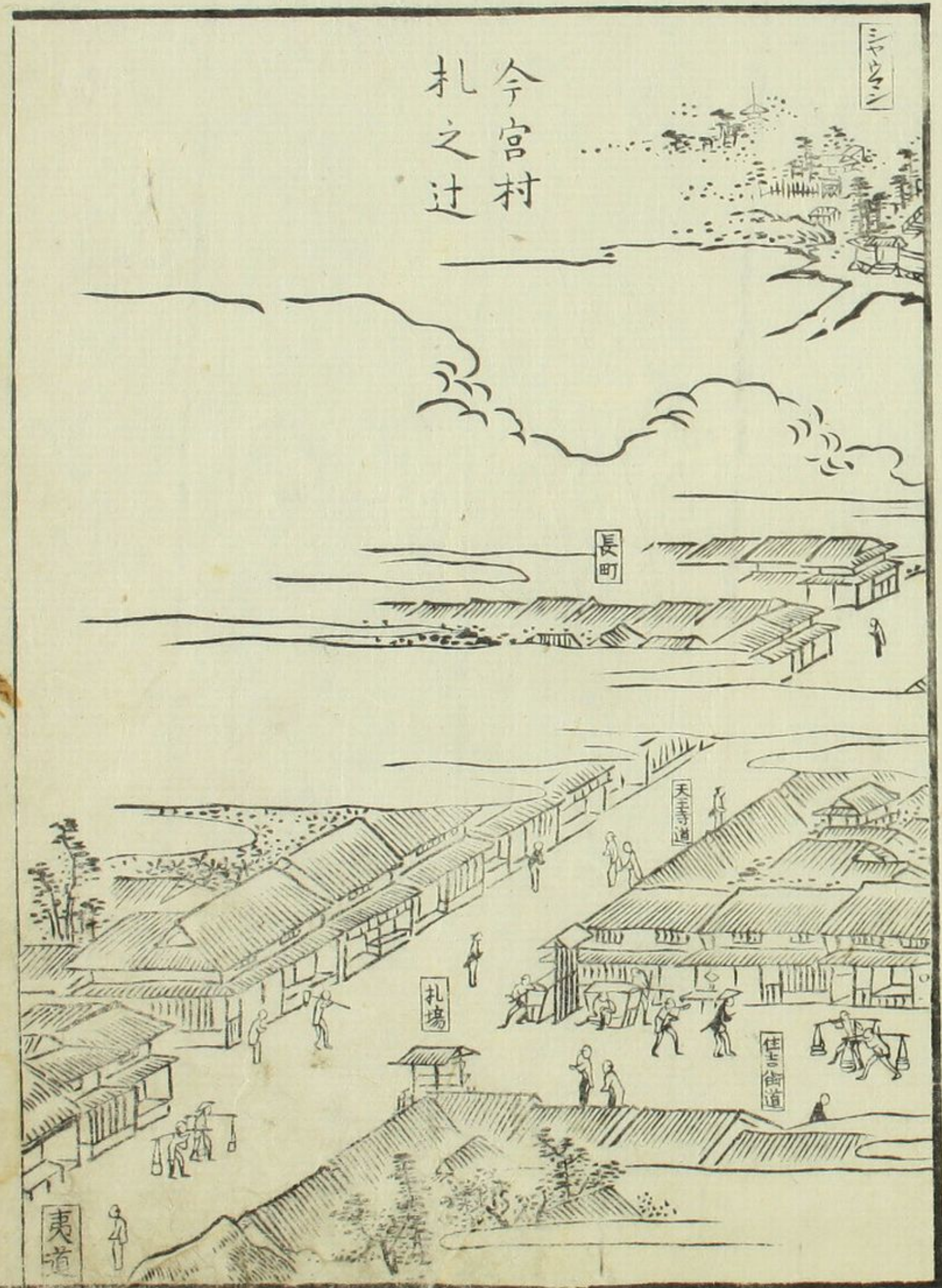
道人傲自然菴
 故事用茶筵於
 墨江岸松樹林
 中予亦一日與
 鳥
 曾聞自在古風流
 茶味禪心一擔頭
 不料尋君松樹下
 風流自在此中遊
 城南遠赴舊青檀
 小昂掛松汲石泉
 鴻漸由來誰得似
 紹鷗古跡未全懸
 掃山懸古甬下榻
 待來人汲得清瀆
 水未曾染世塵



天明壬寅の春
 紫火の茶の會
 傳りたるもの
 之廉齋道人
 好人もある
 何れもあつた
 せうもあつた
 ぶちよきほう
 せうりあつた
 あつたあつた
 北の三島
 あつたあつた
 人觀みんか
 かつたあつた
 興りや

壬寅初春廉齋





地府祭武衛自取御鏡授給昌長

同書曰建名六年四月廿七日壬午將軍家以梶原平三景時
為御使令奉幣住吉社給被奉神馬今夕景時參着社頭註和
歌一首於釣殿之柱

我君乃々向の駒を引連れてり未きことさるあせ

同書曰承元三年七月五日丙申將軍家依御夢想被奉二十

首御詠歌於住吉社内藤右馬允知親為御使

多治真人

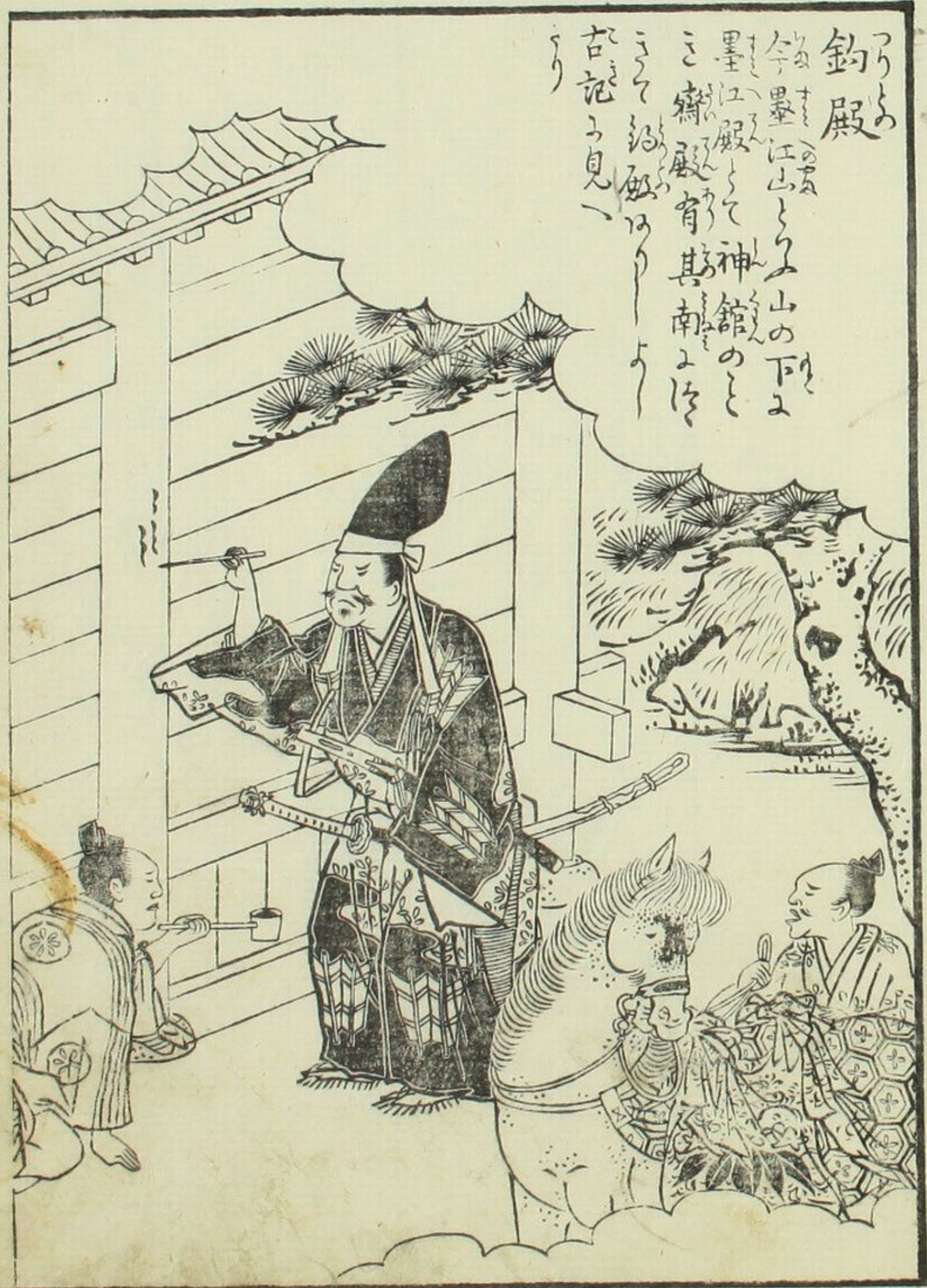
後成

夫ホ

片々こや玉のみもの神やあまがひてはるふ菜のこま

大政大臣

うししと沸きふゆけれ位名の神のま成松の千叶



釣殿

今墨江山の山下
墨江殿にて神館の
と齋殿育其南よけ
うそ釣殿のり
古記に見

攝津國一宮正一位住吉之神

有住吉郡住吉神稅二千六十石境内東西九町南北四町四方鳥井之内東西百九十間南北百八十間延喜式神名帳云住吉郡之神二十二座曰住吉坐神四座大依羅神社四座津太歲神社中臣須牟地神社須牟地神社擔原神社須牟地曾禰神社止柘侶支比賣命神社赤雷比賣命神社天水分豐浦命神社勢能太比賣命神社大海神社二座多米神社船玉神社生根神社也矣今之稱攝社也三津守曰大宅見三之卷矣神玉七家曰板屋曰拍曰為上位稱之而以是社勢也社役人二百六十有余人畧其姓名
平城天皇延曆二十五年四月被授住吉神從一位其後雖有正一位宜旨年月不蕃住吉之社務津守利常傳曰天慶五年五月利常叙從五位去天慶二年依東西兵亂被授諸國之神位一階極位於神也此被授其社司位一階云云天慶兵亂者將門純友也此時依為住吉正一位被授神主利常位一階以是

天慶以前既被奉此神正一位明白也

第一之神殿底筒之男命

第二之神殿中筒之男命

第三之神殿表筒之男命

第四之神殿神功皇后

諱息長足比賣命人皇十四代仲哀天王之御后

攝津國住吉郡住吉鎮座なり神功皇后攝政十

一年辛卯四月廿三日なり今に至りて凡一千五百有餘年

公より宮居御造營なりより車連綿と絶た當社奉

幣諸願を祈り感得りし事舊記のる如く

くまらぬいり及らぬ和奇と奉連守或捧け神宝

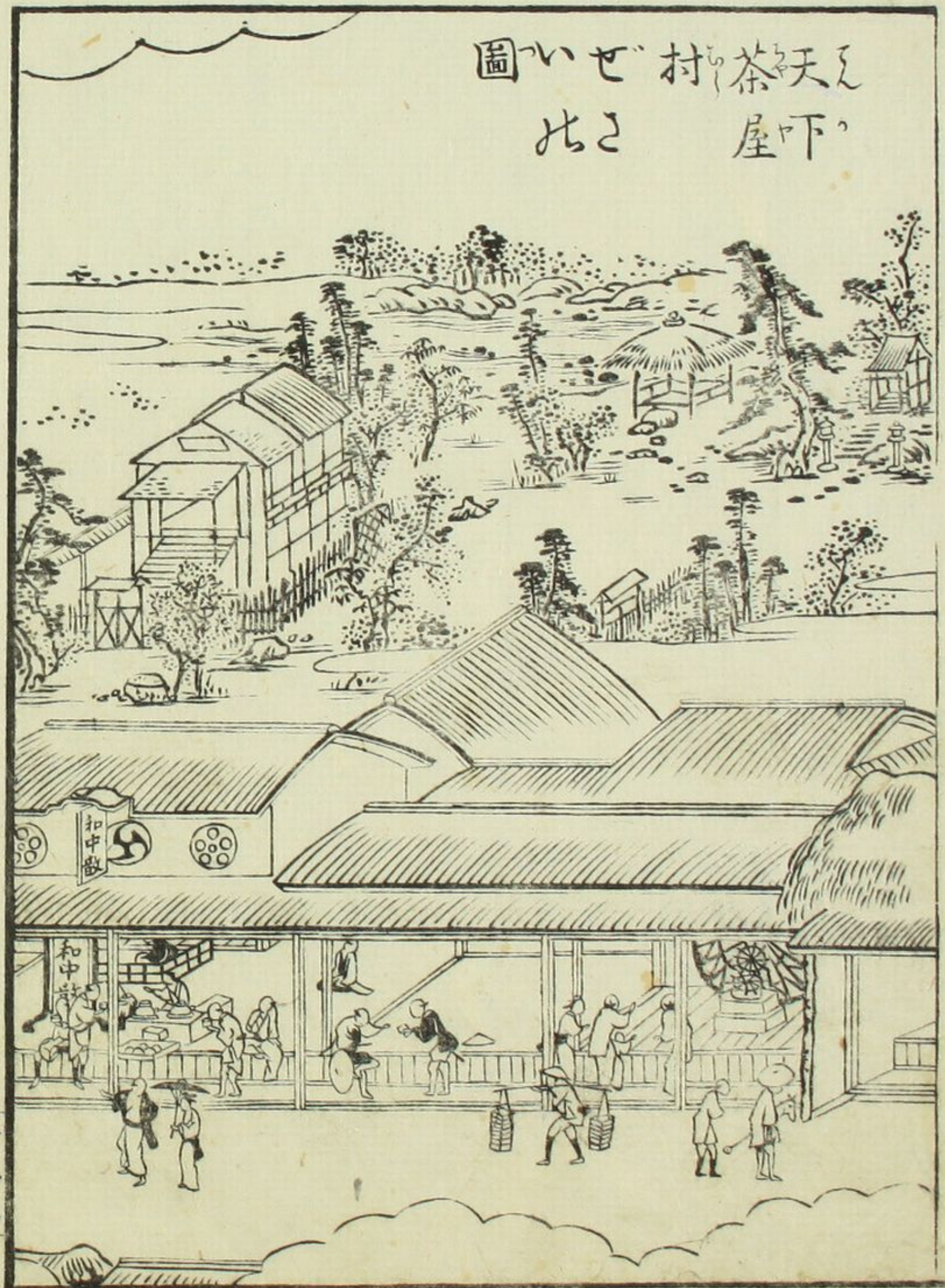
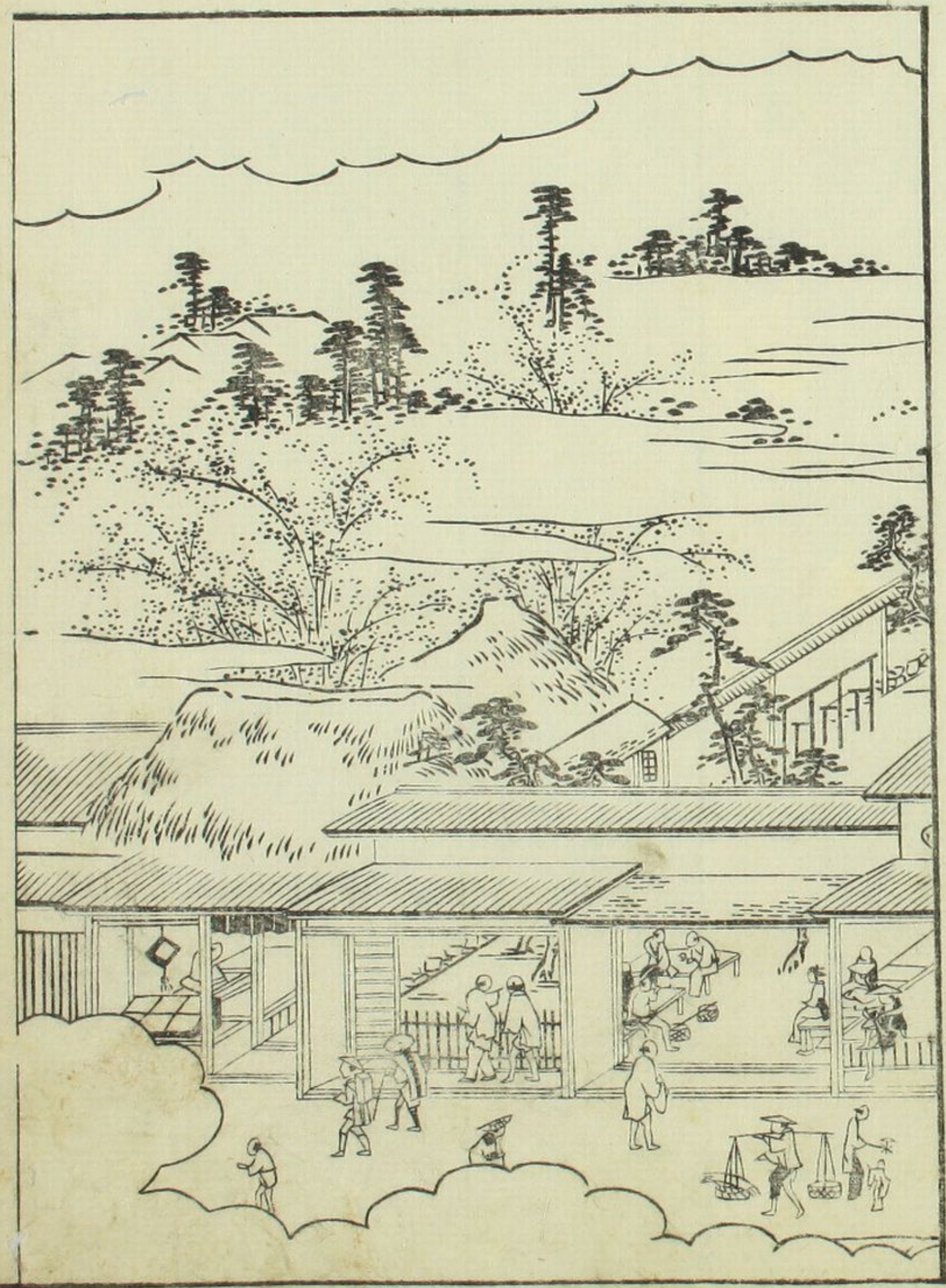
東之
大鳥
井

是より
東、三町余淨土寺
十八町田邊庄
南、三町余津守寺
五町余若松社
西、直、大海神社
神宮寺
市恵比須社
住吉大神北之門
北、直、安部野街道



城寄附する事今猶少うに神徳のいづるきを人のよく知
 とろがれんば爰も不言祭禮年中の行事も多うに神功
 皇后の御時より今又傳り侍りしとくく奥の記に就
 中渡海の船舶風波のうれひなき事と當社に祈り海上安
 全の守護神と崇奉すも宜哉神功皇后記御詠宣ふ我
 和竟服王身而守壽命荒竟為先鋒導師船云云此御
 詠宣と見るに海上安全の御神のこたへ軍陳壽命と
 守護しあふ御神なりまこと一乃御詠宣ふ

吾无弊以正直為弊
 吾无智惠以忠孝為智惠
 吾无德以慈悲為德
 吾无奇得無事為奇得



すく明神の御奇也

いよの國宇和の郡乃魚までも我をいかなんかすくんとす

○清輔と與義抄袋草帑等々住吉四の神殿を玉津島

明神なりとかあり是を和奇三神の御事より附とせり

説成下史和奇三神より住吉の三右神是なり

人磨赤人衣通姫と和奇三聖と稱し奉る四の神殿と

姫神成る故よ此説はよけりすくすく神社考

よ云住吉第一之宮天照太神第二之宮宇佐明神 田霧 姫命

第三之宮 底筒男 中筒男 表筒男 第四之宮神功皇后なりと見たり

されども舊事記古事記日本記延喜式等の旧き事

小もかつ見たいや人の宣命なり住吉三所太明神と
ありて四の神殿乃御事之見侍は何れ其説より
く平き事とあり

○押津の國住吉郡住吉乃御社より奉る西を滄海漫

漫して霧ぬる船舩の淡路明石乃津と見かくま

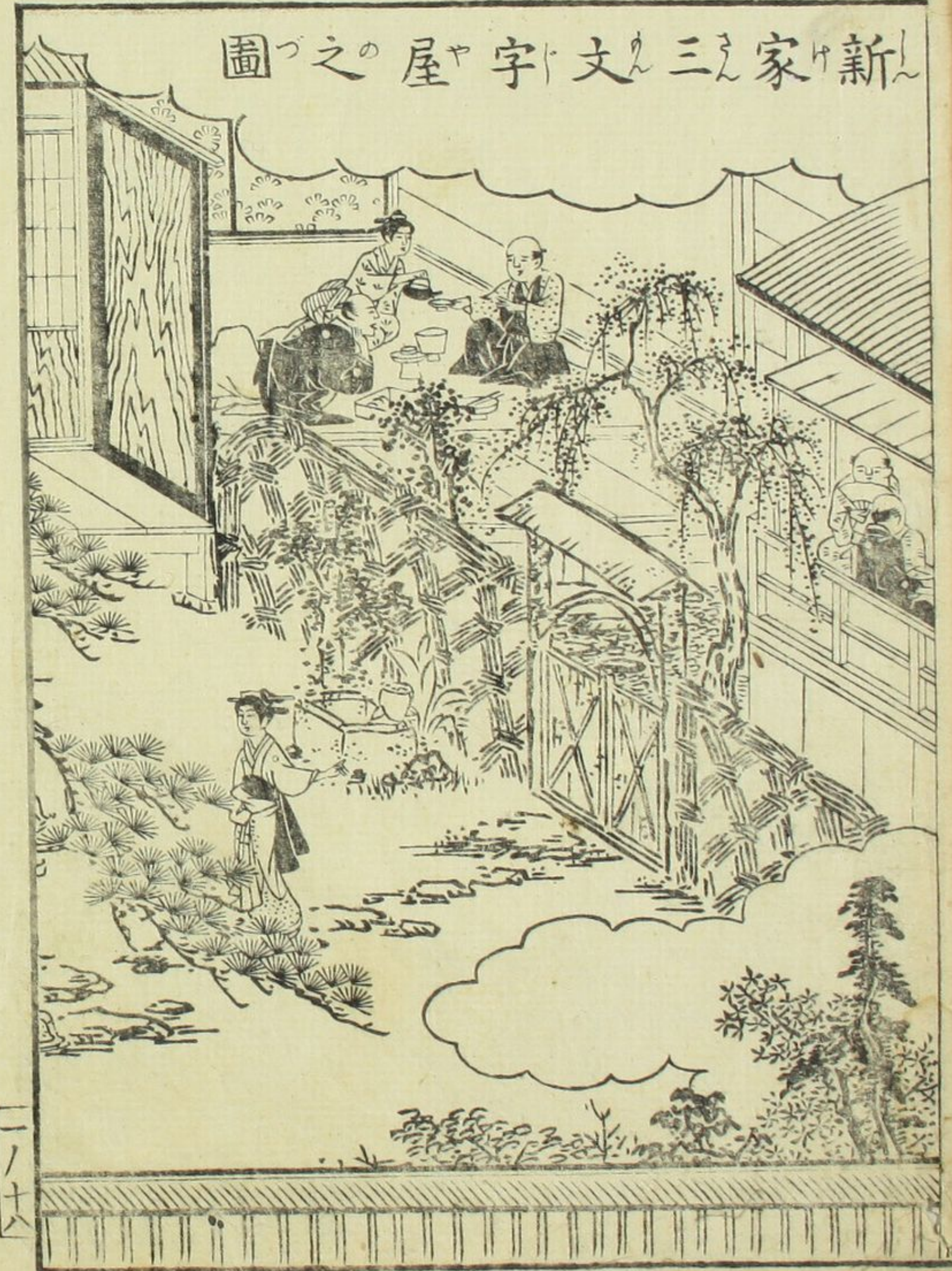
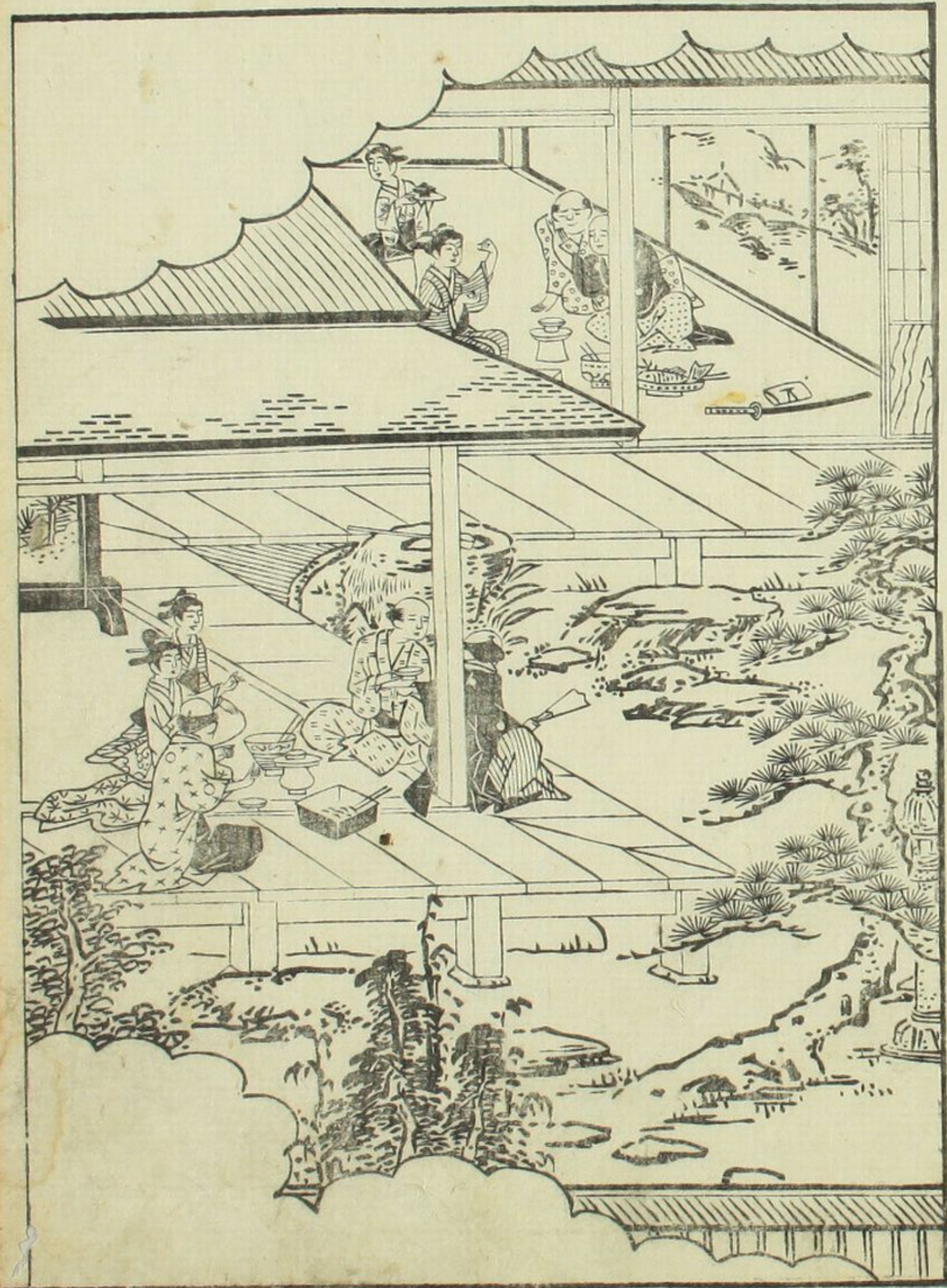
東を高山峨々として金峯かつき乃くみくらよい

たき大和河内と手みくらくとくく揚泉乃咽喉とけり

て俣伯もゆきく農民も往來れ土地又産する物ハ胡子

花壺蘆花と目くまぐり又志州志貝たんと和奇者

流の秘なる事としておぼらけに語りてむく覺えて



衣たり其外兜蓋鳥銃銀朱白粉鬼せん魚の
ころくや割刀と堺の銘みらぶるくま里小野の油と
うるき事とて夫本集も

待宵や遠里小野の油賣つさへと鈴の皮さうの
其の芥子と麦葦など其数多し湖夕晴嵐奥天神
秋月津守寺晚鐘中村夜雨戎島歸帆大仙陵暮雪
海船夕照御田落馬此里の俗住吉の八景とて四時の
かゝめは爰も盡れなくなりぬと詠せし岸の姫松と
今の街道より少し東とて方八丁が滝松の林とありて
残るどむりの事も昔ひ出られて押しきれ大鳥井より



西の方馬場の松原へ五丁み余り高きうらう長峽の橋と
うとせる内川かん浪華津と續きて爰も詣る川舟の所せ
く引なしたる糸竹の音絶る際なく濱邊とてあや
の家居立けし糸蛤の美阿きのよも此所の名物とて爰
よ詣る人賞し侍り社頭とて圃くより献し奉る石と
うらうらやがうらうら立御燈の光り爰然と照りて松
風浪の音もみよひて實も津の國の一乃宮と崇め奉る
もむなりとてあやめ

住吉名勝圖會卷之一終

